

## 『ふくろう党』の系譜

The Genealogy of *Les Chouans*

泉 利明

## 主題の反復

一八二九年、バルザックは『最後のふくろう党員あるいは一八〇〇年のブルターニュ』を、はじめて「オノレ・バルザック」の名で発表する。この作品は『人間喜劇』の出発点となり、時間的な先行性によって特別の意味をもっている。しかしのちに『ふくろう党』となるこの小説は、物語の内容や舞台となる時代背景から見て、バルザックの作品群においては傍系に置かれている。作者は一八四五年、こんな風に述懐する。

この作品は私の最初のもので、受け入れられるのに時間がかかった。私はどうにもこの作品を守ることができなかった。大がかりな企画に取り組んでおり、この作品はそこでは、ごく小さな位置しか占めていなかったからである<sup>(1)</sup>。

ふくろう党の反乱は、作品が発表された時期のほぼ三十年前にさかのぼる出来事であり、それはすでに「歴史」の領分に属するといつてよかろう。モンランは「最後の」ふくろう党員であり、作中で何度か繰り返され、第三章のタイトルともなる「明日なき日」という言葉は、物語の時間が現実の時間とは切り離されていることを強調している。『人間喜劇』を「歴史」として書くのがバルザックの意図でもあったにせよ、その中心となるのはもっと同時代に近い社会である。

しかし、作者自身の言葉に異を唱えることになるが、上のような説明はいささか不正確だろう。「十九世紀風俗研究」だけが、『人間喜劇』を形づくっているのではない。フランス革命以前の時代を物語の背景とする作品は、『ふくろう党』以外にも、『カトリーヌ・ド・メディシスについて』をはじめとしていくつか存在する。また『ふくろう党』と対をなすものとして、「軍隊生活情景」の枠組みのなかでヴァンデ戦争をめぐる作品が継続的に構想されていた。フェルヌ版『ふくろう党』序文には、こうも書かれている。「私が準備している『軍隊生活情景』のなかで、この作品だけが完成されたものであり、十九世紀の内戦の一つの側面、すなわちゲリラ戦の側面を提示している。もう一つの側面すなわち正規の内戦 *guerre civile régulière* は、『ヴァンデの人々』の主題となるだろう。」(VIII, 903) 同様の表現は、一八三五年のフェリックス・ダヴァンによる『十九世紀風俗研究』の「序論」でもすでに使われている。(I, p.1150)

さらに重要なのは、ふくろう党の乱やヴァンデ戦争のように武力を行使する戦いでなく

でも、王党派と共和派の対立が、形を変えながらほかの作品にも現れているという点である。帝政期を舞台とする『暗黒事件』では、王党派の貴族たちがナポレオンの暗殺をもくろみ、登場人物がそれに加担している。七月王政下の物語である『現代史の裏面』の主人公ラ・シャントリー夫人とその娘は、かつて「狂信的ともいえるほどブルボン王家に愛着を抱いており、フランス革命を敵対視して、ナポレオンによる支配を、神の摂理が一七九三年の犯罪的行為を罰するためにフランスに課した災禍としてしか認めていませんでした。」(VIII, 289)『人間喜劇』においてふくろう党の物語は、『ふくろう党』のみによって完結しているのではない。そこには『ふくろう党』の系譜とも呼ぶうる一連の作品が存在しているのである。

したがって、『ふくろう党』を基点として、いくつもの小説が再登場する人物によって結びつく。ふくろう党の事件は、過去であるにしても近い過去であり、そのため、ほかの小説では壮年あるいは老年に達している人々が、『ふくろう党』では若者として行動する。最も明白なのは、王党派と貴族の結びつきである。「噂によれば、オルヌ県での彼らの連絡相手はヴァロワの騎士、デグリニオン侯爵、そしてトレヴィル家の人々ということだった。」(VIII, 957) ヴァロワとトレヴィルは『老嬢』の、デグリニオンは『骨董室』の登場人物である。『ベアトリックス』のデュ・ゲニック男爵はアンティメというあだ名を与えられて『ふくろう党』に登場し、『ソーの舞踏会』や『セザール・ピロトー』のフォンテーヌ伯爵は、グラン・ジャックと呼ばれている。そのほか、ブリゴー (『ピエレット』)、ラ・ビヤルディエール (『平役人』)、ロンギュイ (『セザール・ピロトー』) などについても言及されている。このような作品相互の関連付けは、いうまでもなくのちの修正の際になされたものである。

『現代史の裏面』では、『暗黒事件』のローランス・ド・サン＝シーニュがラ・シャントリー夫人のもとを訪れる。その場面は、この二つの作品と『ふくろう党』とを一挙に結びつける。

サン＝シーニュ伯爵夫人の来訪は、ゴドフロワをひどく驚かせた。貴族社会でも頂点に立つ人間の一人で、そのサロンは中産階級や新興成金には近寄れないものとなっている。  
(…) サン・シーニュ夫人は、彼女の友達の家に寄宿する四人にも愛想よく心のこもった態度を示していたが、特にニコラ氏には敬意を払っていた。(VIII, 254)

ニコラ氏とは、『ふくろう党』の首領モンブランの弟にほかならない。『暗黒事件』と『現代史の裏面』は、前者でシムーズ兄弟を、後者においてラ・シャントリー夫人の娘を弁護するボルダンによってもつながっている。

『ふくろう党』で共和軍を指揮するユロは、『従妹ベット』の中心人物の一人ユロ・デルヴィの兄として再登場する。物語の内容として、『ふくろう党』と『従妹ベット』を結ぶ要素はほとんどない。ただ『ふくろう党』の記憶があれば、弟の妻を何とか助けようとする兄の気持ちと、兄弟二人の人間性の落差が、より強く感じとれるだろう。ユロ男爵が亡

くなると、先に触れた『現代史の裏面』のニコラ氏が葬儀に参列する。それによって、関係ないはずの三つの作品が合流する。

『ふくろう党』と『現代史の裏面』の関係は、さらに密接である。ラ・シャントリー夫人の娘は、『ふくろう党』にも登場するデュ・ヴィサールの騎士すなわちリフォエルの愛人となる。リフォエルを中心とする犯罪に対する起訴状には、『ふくろう党』で描かれた事件について言及され、マルシュ＝ア＝テールやピユ＝ミシュの名前が記されている。

バルザックが最晩年の作品である『従妹ベット』や『現代史の裏面』において、『ふくろう党』の原点に回帰していることは、この作家の特質を理解する上で根本的な問題であろう。それは、『ふくろう党』の時点ですでに作者のなかにあった主題が、作家としての生涯のあいだずっと意識され続けてきた結果である。バルザックはこの主題のなかに、フランス革命後の社会のあり方を考察する要素が含まれていると見ていただろう。

『人間喜劇』のほとんどの人物は、フランス革命の影響と無縁ではない。『ふくろう党』の系譜を広く捉えれば、かなりの数の小説が関係してくる。ただ、われわれが本論で特に焦点を当ててみたいのは、ふくろう党の反乱のもとにある王党派と共和派の対立という政治的な問題が、作品のなかでどのように扱われているかという点である。したがって主に論じられるのは、『ふくろう党』、『暗黒事件』そして『現代史の裏面』となる。

## 政治と文学

バルザックが「政治生活」や「軍隊生活」を作品のテーマとしえたのは、フランス革命が全国的な規模で、政治的な対立を惹起したからにほかならない。そしてその対立を描こうとする作者自身も、何らかの政治思想を抱いている。まずそれについて確認しておかねばならない。

バルザックの信奉する政治思想は、いうまでもなく正統王朝主義である。それを示す文章を拾い出すのはたやすい。たとえば一八三一年十二月に発表された『出発』には、こんな一節がある。「国王とは、受肉した国家である。(…)国王は社会の要である。本当の国王は、国家の力であり、原理であり、思想なのである<sup>(2)</sup>。」この短い作品が扱っているのは、七月革命によって王位を追われたシャルル十世が、一八三〇年八月三日、イギリスに亡命するためにシェルブールの港から「出発」する場面である。一七九三年のルイ十六世の処刑について、もう一度、フランスから国王が奪われたのだった。バルザックの社会思想を最も端的に表現している『人間喜劇』の「総序」の一節も、引用しておこう。「私は宗教と君主政という、二つの永遠の真理の光に照らされながら書いている。これらは、現代の出来事が要求する二つの必要であり、良識のある作家はみな、わが国をその方向へと導くよう努めねばならない。」(I, 13)

しかし、このような主張は、そのまま小説に反映しているわけではない。虚構という枠組みは、作者がみずからの思想を露骨に主張することを許さないのである。文学作品とは、作家が正しいと考える政治思想のプロバガンダではない。政治思想は作品の外にあり、作品にとって無関係ではないものの、政治思想の直接的な表現として作品を解説しようとす

れば、誤読に至りかねないだろう。文学にとって何よりも重要なのは、作品である。バルザックは「文学についての手紙」で、ラトゥーシュの作品をこう批判する。「私はラトゥーシュ氏に対し、その書物を自分の政治思想の普及に利用したことを非難するのではない。

(…) 私が非難するのは、ただ単に、書き方が下手で、首尾一貫せず、人物像が突飛で、この世のものとも思えず、愚かな、そんな書物を出版するからである<sup>(3)</sup>。」

バルザックが「双生児」(I, 13) とみなすカトリックと王政という二つの原理は、『人間喜劇』の描く社会では分断されている。キリスト教に関しては、『村の司祭』であれ、『現代史の裏面』であれ、その精神に忠実であろうとする人物が崇高な存在として提示され、社会をよりよきものにしようと試みる。しかし王党派の人間が人格的な価値をもち、社会を変革してゆくかといえ、かならずしもそうではない。『老嬢』や『骨董室』が示しているのは、アンシャン・レジームを体現するヴァロワやデグリニオンが、ブルジョワであるデュ・ブスキエ(『骨董室』ではデュ・クロワジエ)に破れてゆく姿である。『ふくろう党』で、モンランのもとに集まるふくろう黨員たちは、非文明的で野蛮な人間であることが強調されている。『暗黒事件』でのローランスたちの過激な王党主義は、若者にありがちな短慮として捉えられている部分がある。

逆に、王党派に対立するからといって、共和派が常に否定的に描かれているわけでもない。『ふくろう党』では、ユロをはじめとする共和軍の面々の実直さに、作者は共感を覚えている書きぶりである。『幻滅』には、ミシェル・クレティアンのような魅力的な共和主義者が登場している。これを矛盾と見るべきではなく、そうした共和主義者がいたという事実を作者が認めていたということだろう。『暗黒事件』のローランスはナポレオンを憎み、シャベール大佐はナポレオンを父親であるかのように慕う。それはナポレオンという人物がもっていたそれぞれの側面であって、そこからバルザックのナポレオンに対する単一の認識を導き出せないのと同じことである。

そしてバルザックの政治思想も、けっして一元的ではない。一方に観念的な思想があり、もう一方に社会の現実がある。独裁状態かユートピアでもなければ、この二つが合致することなどありえない。現実を直視すれば、原理的な思想は修正され、折衷的なものとならざるをえないだろう。たとえばシャトーブリアンは、一八三一年にこんな言葉を残しているという。「生まれつき共和主義者で、理性によって王党派であり、榮譽の点ではブルボン王朝を支持する私には、正統王朝主義を維持できないのであれば、誰かよく分からない人間によってもたらされた雑種の君主政よりも、民主主義の方が、ずっと満足できるだろう<sup>(4)</sup>。」バルザックについても、似たようなところがある。

まずバルザックは、現実にはフランス革命が起きてしまったことを否定できないと考える。一八三二年の「王党派の状況に関する試論」には、強い調子でこう書かれている。「八九年に生じた物質的な結果や、フランス革命が思想と物事と利害関係にもたらしたことに反対しようというのは、政治にかかわる言説においては名づけようのない誤りだろう。それは、馬鹿げていて、不可能で、犯罪的で、狂った行為であり、まったくもって常軌を逸した振る舞いとなるだろう<sup>(5)</sup>。」

しかし、だからといって、フランス革命が肯定されるべきでもない。人間の本质は墮落するものであり、革命はその墮落を加速させた。その欠陥を是正するための手段として、バルザックは宗教と君主政が必要だと考える。ただこのような考えは、即座に共和政を排除するわけではない。一八四〇年の「サント＝プーヴについての手紙」には、こう書かれている。

君主政の原理は、共和国の原理と同じく絶対的である。私は、この二つの政治形態の中間に、国家にとって実現性のあるものを知らない。この二つの様態以外は、すべてがいかかわしく、不完全で、凡庸で、議論の余地がある。(…)はっきり言う。私は民衆より神の方を愛する。しかし、絶対的な君主政のもとで生きることができないのなら、共和国の方が、雑多で、活動せず、不道德で、基盤をもたず、原則もない、下劣な政府よりもましだ。そのような政府は、あらゆる感情を爆発させながら、どの感情も活用せず、権力が不在であるために、国家を停滞させてしまう<sup>(6)</sup>。

バルザックにとって重要だったのは、社会が何らかの力によって統一されていることであり、もしそうした状況をもたらしてくれるのなら、共和政であっても構わないのである。一八四八年に、バルザックはこうも述べている。「新しい共和国は強力で賢明であってほしい。なぜなら私たちには、契約者の方から十五年以上あるいは十八年以上の契約をしてくれる政府が必要だからだ。これが私の願いである。そしてこの願いは、信条表明のすべてを言いあらわしている<sup>(7)</sup>。」

とはいってもこれは今後の願望であり、バルザックが生きていた現実の社会は、そのようなものではなかった。結果として、バルザックの政治小説は、二つの異なる方向に枝分かれしているともいえるだろう。一つは、王権によるものではないが、社会を統一する力をもつ指導者が登場する、『田舎医者』や『村の司祭』の方向である。そしてもう一つは、社会がイデオロギー的に、また利害関係によって分裂し、対立する様相を描く。それを代表するのが『ふくろう党』の系譜に属する小説である。

## 社会の分裂

バルザックは政治にかかわる小説において、個人ではなく集団を対象とすることを、方法論としてはっきりと意識していた。一八三五年のフェリックス・ダヴァンによる『十九世紀風俗研究』の「序論」には、こう書かれている。「『パリ生活情景』で、個人の生活の描写は終わる。(…)『政治生活情景』は、もっと広い思想を表現するだろう。そこに登場する人物たちは、集団の利害関係を示すだろう。(…)『軍隊生活情景』は、戦うために進む集団の生活を、その主だった特徴において描くことを目的としている。」(I, 1147-8)『人間喜劇』の「総序」には、こうある。「これら三つの書物において、社会生活を描いたあと、残っているのは、何人もの利害関係、あるいはすべての人々の利害関係を要約する例外的存在を示すことである。」(I, 19)

最終的な分類として、『ふくろう党』が「軍隊生活情景」に属し、『暗黒事件』が「政治生活情景」に、『現代史の裏面』が「パリ生活情景」に含められているという違いは、特に問題とするに値しない。「軍隊生活情景」は「政治生活情景」の「結果」(I, 1148)なのであり、二つの「情景」の同質性に疑問の余地はない。また『現代史の裏面』は、一八四六年のフルヌ版では「政治生活情景」に含まれていた。

フランス革命は、国王と宗教が担っていた単一の中心を喪失させた。新しい社会に対する政治的な見解や、その社会において生じる利害関係が、人と人とを結びつけ、集団を形成する。そして、『ふくろう党』の系譜に属する作品でバルザックが表現しようとしたのは、フランス社会が分裂し、対立が生じているという事態であった。

まず、それぞれの集団がどのような政治的主張を抱いているのかを見ておこう。『ふくろう党』に登場する副官ジェラルルの次のような言葉は、フランス革命の理想を謳いあげ、純粋な共和主義の表現となっている。

われわれの任務は、フランスの領土を守ることだけではありません。われわれには二重の使命があるのです。われわれは、国の魂、すなわち自由と独立というあの高邁な原理を守り、議会によって呼び起こされ、少しずつあたりに波及してゆくはずのあの人間理性を守る義務があるのではないですか。(VIII, 929)

では、ふくろう党の方はどうか。ジェラルルと対応するように、首領であるモントランは原理的な形で反革命を意識している。「国王は司祭だ。そして私は、信仰のために戦う。」(VIII, 1061) キリスト教と国王が一体化したものこそが、彼らを守るべき体制なのである。

マリー・ド・ヴェルヌイユは、共和軍とふくろう党にはさまれ、二つの陣営の理念を対比的に見ることのできる立場に置かれている。

着古した青い軍服、すり切れた赤い袖章、さらには行軍のため後方にずり落ちた肩飾にいたるまで(…)、いっさいがこの二人の軍人を周囲の人間から区別していた。「ああ、ここには国家と自由がある」と彼女は思った。それから王党派の方に視線を向けながらこう考えた。「そしてあそこには一人の人間、国王、特権がある。」(VIII, 1045)

「国家」と「自由」には定冠詞が、後者の三つの名詞には不定冠詞が付けられていることが示すように、革命派が追い求めているのは抽象的な理念なのに対し、反革命派が守ろうとするのは、それがたとえ消滅しつつあるにせよ、実質的な存在である。

ただ、ふくろう党の首領モントランとほかのふくろう党員のあいだには、大きな隔りがある。モントランは貴族としての誇りをもち、道を踏み外した行為を看過できない。しかしふくろう党員たちを特徴づけているのは、野蛮さであり、非文明性である。もちろん彼らに王党派としての意識がないわけではない。共和軍の捕虜となったふくろう党員は、モントランについて「あいつは暴君とその同盟者ピットから派遣されたんだ」と聞くと、

「神と王からつかわされたんだ」といい、「国王万歳」(VIII, 939)と叫んで死ぬ。ただ彼らにとっての宗教は、フランスという国家の政治的・社会的次元とかかわるものではなく、もっぱら死後の救済をもとめる手段となっている。ふくろう党をまとめる司祭ギュダンも、「宗教を一つの道具として用い、黨員たちに死後の復活を信じ込ませ、巧妙な予言によって彼らの狂信を維持するすべを心得ている。」(VIII, 1036) また彼らは、金銭的に貪欲であり、平気で金を略奪し、残酷な所業を見せる。このことは、馬車の襲撃や、ドルジュモンに対する拷問のような行為によって強調されている。

ふくろう党についてのこのような否定的な捉え方は、ごく一般的なものであった。ふくろう党は、共和軍と対立するとともに、同じ反革命運動であるヴァンデ戦争とも対比されるのである。バルザックが『ふくろう党』をゲリラ戦とみなし、「正規の内乱」であるヴァンデ戦争と区別している文章はすでに引用した。ヴィクトル・ユゴーは『九三年』でこんな言い方をしている。「ヴァンデの戦いは良いものであり、ふくろう党の乱はもっと悪いものだ。ただ内戦においては、より良いのは悪い方だ。戦いの良さとは、それが作り出した悪によって判断される<sup>(8)</sup>。」ふくろう党の野蛮さは、同時にモンブランという人物の高貴さを際立たせている。そこに、マリーを惹きつける理由があったのであり、モンブランは、ふくろう党の乱のなかにヴァンデの戦いの要素を導入する役割を果たしているともいえるだろう。

『ふくろう党』において王党派と共和派は真っ向から衝突する。同様に『暗黒事件』のローランスは、「純粹で、戦闘的で、情け容赦のない王政主義」(VIII, 548)を体現しており、「ボナパルトを打倒することしか考えていない。」(VIII, 538)『現代史の裏面』のラ・シャントリー夫人たちは、もはやローランスのような過激な思想をもたないが、やはり革命に起因する事件によって苦しめられ、新しい社会にあり方に批判的である。「王権と宗教を転覆させ、古いフランスを作り上げていたものをバラバラにしてしまった四十年間の激動によって、私たちはみな押しつぶされ、心の中か家族の利益や財産の上で、傷を受けているのです」(VIII, 243)と、ラ・シャントリー夫人はいう。

革命に賛成する側と反対する側の対立は、古いフランスに価値を見出すかどうかという時間的な対立に還元される。フランス革命という事件が分岐点となって、過去と現在の対立が生じたのである。『ふくろう党』で共和軍は、「未来のために、支配している現在を抛り所として、過去を破壊する。」(VIII, 1045)しかし王党派が共和国を攻撃するのは、「滅びた君主政や、禁圧された宗教、亡命していた王公、廃止された特権を再び立てなおそう」(VIII, 1046)とするためである。

『ふくろう党』でマリーはギュダンが執り行うミサを目撃するが、そこにはドルイド教的なイメージが重ね合わされている。「祭服のみすぼらしさ、空間のなかでつぶやきのように響く弱々しい司祭の声、確信に満ち、同じ感情で結ばれ、質素な祭壇の前にひれ伏している人々、十字架の飾り気のなさ、教会の粗野な力強さ、時間と場所、これらすべてがこの情景に、キリスト教の初期の時代を特徴づけていた素朴さを与えていた。」(VIII, 1117) また『暗黒事件』で、シムーズ兄弟の長男は叫ぶ。「われわれは、中世の真の騎士

なのだ。われわれは、祖先たちにふさわしい人間だ。」(VIII, 620) 彼らにとって守るべきは、過去からの継続性であり、そのことがすなわち革命の否定となっている。

時間の持続は、物語とかかわる空間の設定によっても補強されている。『ふくろう党』のブルターニュが、フランスのなかでもとりわけ革命以前の時間を保持している地域であることはいうまでもない。『現代史の裏面』でラ・シャントリー夫人の住むシテ島は、パリの中心にありながら、同時代の時間とは隔絶した雰囲気を漂わせている。「司祭がゴドフロワのために椅子を前に出し、ラ・シャントリー夫人が『ご着座を』Seyez-vousという古い言葉を使って仕草ですすめたので、将来の下宿人は腰を下ろした。このパリの人間は、自分がパリからずっと離れた、バス＝ノルマンディかカナダの奥地にでもいるような気がした。」(VIII, 227) 『暗黒事件』のゴンドルヴィルも、過去を濃密に感じさせる空間である。かつては貴族によって所有されていたその空間がマランの手に渡ることは、王党派の人間にとって、自分たちの過去を奪われ、必然的に、現在を否定されるということであった。

このように、『ふくろう党』の系譜に属する作品では、フランス革命後の社会を受け入れるか、否定するかで二つに分かれ、対立する様子が描かれている。ただ、その対立の図式ばかりを強調すれば、これらの小説がもつ豊かさを取り逃がしてしまうことにもなるだろう。『ふくろう党』、『暗黒事件』そして『現代史の裏面』は、物語の空間と時間を異にしている。『暗黒事件』の時代には、もはや貴族の衰退は明らかであり、ナポレオンという新しい権力が登場した。『現代史の裏面』においては、人物のなかの王党派的要素が意図的に見えにくくされている。つまりバルザックは、同じ主題を意識しながら、それを変奏し、別の形で展開しているのである。したがって次に検討しなければならないのは、物語の細部における、対立のあり方の複数性であり、またその差異性であろう。

### 対立の図式をこえて

二つの陣営の敵対関係は、どのような結末を迎えるのか。それが作品の興味を成り立たせている要素の一つであるのは間違いない。しかし、共和軍と王党派の戦いを軸とする『ふくろう党』であっても、物語はそんな単純な構図にはおさまらない。まして『暗黒事件』や『現代史の裏面』では、タイトルに含まれる *ténébreuses* や *envers* という語が喚起するように、さらに複雑で謎めいた要素が含まれている。

その複雑さはまず、これらの小説に登場する人物の心理や行動のなかに、均質なはずの集団からはみだすものが数多くあることに由来している。それは、小説という形式の必然ともいえるだろう。集団は集団としてたがいに対立するが、一方で集団を構成する一人一人の特徴が具体的に書き込まれることにより、集団の物語は個人の物語へと横滑りしてゆく。政治的な問題を思想として論じる場合は、個人の問題は捨象されうるが、小説では個人が中心となり、集団を形成すると同時に、個人個人の差異が、集団の内部での関係あるいは外部との関係に波及し、独自の物語を作り出す。

そもそも、旗幟を鮮明にした対立は、物語の表面にすぎない。『ふくろう党』についてモーリス・メナールは、「誰もが変装し、あらゆるものが見せかけで、すべては隠したり騙す

ために作られている<sup>9)</sup>と指摘している。この小説が、いくつもの隠蔽や秘匿を積み重ねて作られていることは、すでに多くの研究で明らかにされている。モンランは初めてマリー・ド・ヴェルヌイユに会ったとき、ふくろう党の首領であることを明かさず、共和派を装う。デュ・ガ夫人は、モンランの母親を自称する。マリーの方も、モンランを誘惑して共和軍に引き渡す任務を帯びていることなど言えるわけもない。

相手を出し抜いて勝つのが目的なのだから、このような虚偽は当然であろう。『暗黒事件』でも、同じような政治的理念の隠蔽があちこちに見てとれる。ミシューは、自分がシムーズ家の財産を管理していることを、妻にすら伝えない。彼は自分の役目を他人にさとられないよう、「恐怖時代に、ジャコバン派のあるクラブの会長」(VIII, 503)となっていたし、シムーズ侯爵夫妻に死刑の宣告をする革命裁判所所長の娘と結婚するのである。ローランスたちは、ナポレオンの暗殺計画に加担しているが、これまた口外できるような事柄ではない。ドートセール夫妻は、亡命している息子たちがひそかにフランスに戻ってきて、「両親と同じ屋根の下で、ローランス自身の寝室で一夜を過ごした」(VIII, 541)などとは夢にも思っていない。

もう一つ重要なのは、登場人物において政治的理念への忠誠がかならずしも絶対的ではないということである。人間の感情は揺れるものであり、したがって集団の均質性はあちこちで綻びを見せている。たとえば『ふくろう党』において、ブルターニュの人間がみな王党派なのではない。この地域内で思想的な分裂があったことを示す例が、司祭ギュダンとその甥ギュダンの関係である。甥は、「僕はフランスを守ることに決めたんです」(VIII, 951)といい、おじの「地獄におちるぞ」(Ibid)という言葉にも耳を貸さず共和軍に入り、ユロの信頼を得て活躍する。しかし、彼ら是对立することになっても、たがいに肉親としての愛情が消え去ったわけではない。おじが殺されたのを見て、甥は深く悲しむ。「もし国王が戻ってきて、国中で僕の首を取ろうとしても、おじさんは僧衣の下に僕を隠してくれたでしょう。」(VIII, 1171)ここでは二人の対立とその揺れが、同名であることによって同時に強調されている。

マリー・ド・ヴェルヌイユは、ローランスやラ・シャントリー夫人と異なり、特別の政治的理念や社会についての思想をもっているわけではない。彼女にとって何よりも重要なのは、みずからの感情である。共和国の手先でありながら王党派の首領を愛してしまうという表面的な矛盾は、その感情の激しさによって解消されている。あるときマリーは、「ボナパルトが、あなたの共和国が、ふくろう党が、国王が、ガーが、いったい私に何をしてくれるというの」(VIII, 992)という。この言葉は、彼女が対立の構図とは別のところに位置していることを明白に示しており、どこにも属さないという彼女の特徴が、『ふくろう党』の物語を動かしている。

ギャロップ＝ショピーヌも、対立する双方の陣営にかかわっている。彼は、ふくろう党員でありながら金銭欲が強く、高利貸しのドルジュモンに便宜をはかって小銭を稼ぐ。政治的抗争とは別に、金銭の支配という新しい社会の特徴を物語に導入しているドルジュモンは、マリーにいう。「ギャロップ＝ショピーヌに見つけられても、夜なら幽霊と取り違

えてくれるだろうし、昼なら十エキュやれば見逃してくれる。」(VIII, 1091) またギャロップ=ショピーヌの妻バルベットは、ふくろう党を装った共和軍に騙され、モンランの居場所を教えてしまう。その事実が露見したために、マルシュ=ア=テールとピユ=ミッシュは、彼女の夫の首を刎ねる。妻は、夫を処刑したふくろう党の非情さに憤り、彼らに復讐するために息子を共和軍に入れる。これもまた、対立の構図が大きく崩れた一例である。

『暗黒事件』の時代になると、『ふくろう党』のような王党派と共和派による単純な対立はもはや成り立たない。ローランスたちの過激な王政主義はすでに時代遅れとなっており、貴族としての威光も薄れつつある。その代わりに顕著になってゆくの、王党派と共和派の相互浸透である。マラン・ド・ゴンドルヴィルは、「二流の政治家で、すべての政府とつながっている、あの共和主義者たちの典型」(VIII, 492)であり、「ブルボン家の秘密にかかわっている。」(VIII, 524) 『暗黒事件』の物語を成立させる重要な要素であるこの二重性は、登場人物だけのものではない。ジョゼフ・フーシェは、「かつて所属していた山岳党の秘密と、最後に所属することになる王党派の秘密を握っていた」(VIII, 552)し、ナポレオンもまた、「共和国の子供でありながら、ブリュメール十八日にはその共和国の転覆を企てた」(VIII, 525)のである。

『ふくろう党』と『暗黒事件』にコランタンが登場して引き受けるのは、隠蔽された意図や真実を見抜く役回りである。政治警察は、フーシェによって革命期に創設された組織だが、これらの物語の内部では、警察は共和国と歩調を共にしているのではない。『ふくろう党』のユロがコランタンを毛嫌いするように、コランタンやペイラードは、共和派と王党派の対立とは別の要素として機能している。

しかし、彼らの存在は物語の展開にとって不可欠である。秘密が作り出される以上、それを解明する人物がいなければならない。コランタンは『人間喜劇』のなかで、医者のピアンションや弁護士のデルヴィルと同じような役割を果たしているともいえるだろう。人間が内部に隠しもち、外からはうかがいしれないものを、彼らは見抜く。ピアンションは身体的な要因を、デルヴィルは私生活の謎を、そしてコランタンは犯罪を嗅ぎ当てるのである。

ピエール・バルベリスはその『ふくろう党』の冒頭でこう指摘している。「『最後のふくろう党員』を読むというのは、《出来事》や歴史を読む以上に、ある <sup>レクチュール</sup>読みを読むことである。小説の空間のなかで、<sup>レクチュール</sup>読みは、その最も広い意味において、本質的な位置を占めている<sup>(10)</sup>。」モンランも、マリーも、ユロも、マルシュ=ア=テールも、コランタンも、何かを隠している。したがってこの小説の登場人物は、たがいに相手の裏を読み解こうとする、「行為者にして読者<sup>(11)</sup>」acteur/lecteurにほかならない。この指摘は、『ふくろう党』を越えて、バルザックの小説の特徴を言い当てているものとして貴重である。ここで論じている『ふくろう党』の系譜に属する小説では、読みという行為のなかに、政治的、社会的、歴史的要素が関与している。ミシュー、コランタン、ゴドフロワたちの読みが、物語を進行させ、同時に、作品を読むわれわれも、登場人物の読みにみずからの読みを重ね合わせるのである。

二つの陣営が対立するだけの単純な状況であれば、深い読みなど必要ではない。これらの作品において党派的な抗争は現実の表層にすぎず、その奥にあるものが重要なのである。そして『ふくろう党』のマリー、『暗黒事件』のローランス、『現代史の裏面』のラ・シャントリー夫人が、いずれも政治的な問題にかかわりながら、女性であるということは、バルザックの政治小説の大きな特徴となっているとともに、作品の奥行きをいっそう深めている要因だと思われる（ここに、『村の司祭』のヴェロニックを加えてもよい）。彼女たちは、娘・妻・母といった家庭内での従属的な立場にとどまらず、政治や社会に関与し、女性に与えられた限定的な枠から大きくはみ出す。しかし同時に、彼女たちは男性の多くがそうであるように、決められた役割のなかに固定された存在ではない。彼女たちには、女性としての心理や感情があり、それが作品に両面性や多義性を与えている。

一八三〇年以降のフランスで、王政が復活することはない。三つの作品においても、王党派はいずれも、新しい時代の前で膝を屈する。モンランはユロに、弟への次のような遺言を託す。「あなたの誠実さを頼りにお願いします。ロンドンにいる私の弟に、私の死を伝えてください。そして、私の最後の言葉に従う気持ちがあるなら、今後はフランスと戦わないように、ただ国王に尽くすことを決してやめないようにと、書き送ってください。」

(VIII, 1210) ローランスは、いとこたちの特赦を求めて、プロシア軍と戦うナポレオンのもとに出向いて頭を下げる。ラ・シャントリー夫人は、娘たちを断頭台へと送った憎むべきブルック男爵を許す。「今でも目に浮かぶ、処刑台に立つルイ十六世とマリー・アントワネットに免じて、エリザベト夫人に免じて、私の娘に免じて、あなたのお嬢様に免じて、イエス様に免じて、あなたを許してさしあげます。」(VIII, 412) ただ、こうした結末は、王党派の敗北を意味しているのではない。これらの人物において、王党派としての理念は維持されているのである。

ふくろう党員たちは、すでに引用したように、「滅びた君主政や、禁圧された宗教、亡命していた王公、廃止された特権を再び立てなおそう」(VIII, 1046) とした。つまり彼らは革命をなかったものにしたかったのである。しかしモンランは、ふくろう党の首領でありながら、考え方を少し異にしている。彼は、「廢墟の上にうずくまりながら、過去を未来へと変えたいと望んでいる。」(VIII, 1046) 過去と未来は、たがいに排除しあうのではなく、接合されていなければならない。実際の行動としては大きく違っているが、ラ・シャントリー夫人たちが試みていたのも、これと同じであろう。モンランの弟が『現代史の裏面』に登場する意味を見過ごしてはならない。彼は作品を越えて兄の遺志を受け継いでいる。

その意味で、『現代史の裏面』の結末は重要である。この小説でラ・シャントリー夫人たちは、表立って共和派と対立しているのではない。『現代史の裏面』を形づくっているのは、彼女たちと、ゴドフロワと、ブルックの三角形である。ゴドフロワは、小説の中心人物としては例外的といえるほど凡庸な人物である。彼は、「欲望が衰弱し、自負していた能力は消え失せ、活力がなくなり、野心は踏みにじられ、正当な形で高くそびえ立つすべてのものに対する憎しみが、これまでのすべての失望によってさらに募っている」

(VIII, 222) ような男であり、作者自身、この物語が「あらゆるものに幻滅した若者に対する六十歳の老婦人の影響という、ほとんど滑稽な事実から始まる」(VIII, 252) と認めている。

しかし、彼の凡庸さがなければ、この小説は成立しない。ゴドフロワの凡庸さは、七月王政下のフランス社会の凡庸さと通じあっているのである。作品最後のページでブルラック男爵がラ・シャントリー夫人に許され、ゴドフロワがその凡庸さにもかかわらず「慰めの兄弟」の一員として認められることで、フランス革命と、革命後の社会と、そして「永遠のもののみを求めている」(VIII, 247) 彼女たちの理念が一挙に統合される。ここにこの小説の大きな主題があるのではないか。

バルザックは『人間喜劇』総序で、宗教と君主政という「二つの永遠の真理」の重要性を強調したが、これらの真理は絶対的なものとして、つまりそれ以外を排除したものとしてあるのではない。重要なのは、社会がどのような体制になろうとも、「その光で照らされ」(I, 13) 続いていることである。この小説の結末は、そう告げているように思われる。

そして、過去と未来の結合というこの主題をより明確にするためにも、『現代史の裏面』にはふくろう党の事件が必要であった。ブルラックの起訴状による事件についての言及は、読みにくく、ふくろう党の行動を小説のように生き生きと再現しているわけではない。しかし作者はやはり、起訴状という無味乾燥な記述のなかに、ふくろう党員たちと若き日のラ・シャントリー夫人およびその家族がともにいる姿を思い描くよう、読者に要請しているように思われる。彼女の慈善行為のもととなる内面の苦しみの切実さを理解し、また『ふくろう党』の時点と『現代史の裏面』の時点の隔たりを感じ取るためにも、『ふくろう党』の記憶がどうしても必要なのである。

小説は、歴史や政治論とは異なる、虚構にしか達成しえない形で、時代の状況を提示する。政治的な集団があり、それがほかの集団と対立するとき、ただ理念が主張され、出来事が記述されるのではなく、そこに、個人としての感情や欲望などが混じりあい、それらを含めながら、物語という全体の意味と構造が生み出される。しかもバルザックの場合、単独の小説を書いたのではなく、同じ主題をめぐって、いくつかの小説を、人物を再登場させつつ、別の時代と物語を設定して書いた。そうした時間的・空間的な広がりや交差させつつ全体を見ることで、初めて捉えられる歴史の現実がある。『ふくろう党』の系譜に属する小説は、そのことを教えてくれるだろう。

(注)

- (1) “Préface de l'édition Furne”, *La Comédie humaine*, dir. P.-G. Castex, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, t. VIII, 1977, p.903.以下、序文等も含め、『人間喜劇』に収められている作品については、引用文の後にプレイヤー版の巻数と頁数を記す。
- (2) “Le Départ”, Bibliothèque de la Pléiade, *Œuvres diverses*, t.II, Gallimard, 1996, p.1024.
- (3) “Lettre sur la littérature”, *Œuvres diverses*, t. III, Conard, 1940, p.279.

- (4) Chateaubriand, *De la nouvelle proposition relative au bannissement de Charles X et de sa famille*. Antoine Compagnon, *Les Antimodernes de Joseph de Maistre à Roland Barthes*, Gallimard, 2005, p.26から引用。
- (5) “Essai sur la situation du parti royaliste”, *Œuvres diverses*, t.II, Gallimard, 1996, p.1063.
- (6) “Lettre sur Sainte-Beuve”, *Œuvres diverses*, t. III, Conard, p.299.
- (7) “Profession de foi politique”, *Œuvres diverses*, t. III, Conard, p.682.
- (8) Victor Hugo, *Quatrevingt-treize*, Folio, Gallimard, 1979, p.103.
- (9) Maurice Ménard, “Introduction”, *Les Chouans*, GF-Flammarion, 1988, p.38.
- (10) Pierre Barbéris, “Roman historique et roman d’amour - Lecture du *Dernier Chouan*”, *Revue d’histoire littéraire de la France*, mai-juin, 1975, p.289.
- (11) Ibid.